

報道各位

TOKYO FM『クロノス』 ～ 図鑑の寄付による被災地サポート ～ 「被災地の子どもの好奇心サポートプロジェクト～図鑑を贈ろう」

9月15日、寄贈先の中学校生徒が TOKYO FM を来訪 生放送にて全国のリスナーへお礼を伝える

TOKYO FM では、東日本大震災により被災された皆さまを支援する活動の一環として、朝のワイド番組『クロノス』(月曜日～金曜日 6時から8時30分)にて、2011年4月18日(月)から5月15日(日)までの期間、番組とfacebook を通じてリスナーに「図鑑」の寄付を呼びかける「被災地の子どもの好奇心サポートプロジェクト～図鑑を贈ろう」を実施致しました。

この活動で全国のリスナーから1万冊を超える図鑑が TOKYO FM に寄せられ、寄付された図鑑は被災地の児童に届けられています。

2011年9月15日、寄贈先のうちのひとつ、**宮城県登米市南三陸町の戸倉中学校より、図鑑を寄付してくれたリスナーのみなさまと TOKYO FM スタッフにお礼を伝えたい、と、修学旅行の道中に TOKYO FM を来訪、当日の生放送に出演し、全国のリスナーへお礼を伝えました。**戸倉中学校は、去る6月に『クロノス』スタッフが直接訪問して図鑑を届け、子どもたちと共に本棚を設置し、図鑑を運び入れる作業を行った学校です。

※スタッフによる現地レポートは後述

TOKYO FM を訪れ生放送に出演したのは、同校の教頭先生1名と、三年生の生徒5名(男子3名、女子2名)。初めてのラジオ出演に緊張しながらも、パーソナリティ中西哲生・古賀涼子とともに、震災から6ヶ月経った現在、自分たちが感じていることや、仮設住宅での暮らしについて、そして、全国のリスナーから寄贈された図鑑がどう活用されているかなどを、自分たちの言葉で伝えてくれました。

放送を通じて、図鑑を寄付して下さったリスナーのみなさまへ子どもたちの生の声と感謝の気持ちを届けることができました。

TOKYO FM は今後も、被災された皆様へ継続的に支援活動を行ってまいります。
本件、何卒ご掲載賜りますようお願い申し上げます。

【放送概要】

- 番組名 : 『クロノス』(番組HP: <http://www.jfn.co.jp/ch/>)
- 放送形式 : TOKYO FM アースギャラリーから生放送
- 放送局 : 全国38局ネット
- パーソナリティ : 中西哲生、古賀涼子
- ゲスト : 戸倉中学校 谷山教頭・生徒5名(三年生 男子3名、女子2名)
- ゲスト出演時間 : 2011年9月15日(木) 7時20分～7時30分
- 主なコメント(生放送および取材時)

(谷山教頭先生:被災から6ヶ月・現在の学校の様子について)

ほとんどの生徒が家を流され仮設住宅で生活している中、現在はスクールバスで仮設住宅をまわって通学させているが、一時間以上かかる生徒もあり課題が多い。

(生徒・中3女子:今感じていること)

前にいた場所はベランダから広い海が見えたが、今は辺りにたんぼしか見えない。海がないとさみしい。

(生徒・中3女子:仮説住宅での暮らしについて)

仮設住宅は狭くて暑い。クーラーはついているが暑く、5人で住むにはとても狭い。

(谷山教頭先生:寄贈された図鑑について)

寄贈いただいた6月は、ちょうど図鑑などの本が読みたくなる時期だった。小学校でも中学校でも大活躍している。

(生徒・中3男子:寄贈された図鑑について)

楽しいことがいっぱい書いてあるので見ているだけで楽しかった。

(生徒・中3女子:寄贈された図鑑について)

沢山の方に支援していただいてとても嬉しかった。

(生徒・中3女子:自分の夢について)

動物関係の仕事につきたい。(寄贈された図鑑の中に)動物の図鑑もあって嬉しかった。将来、猫や犬の飼育をしたい。

(谷山教頭:図鑑の実際の活用状況について)

図書室はもちろん校舎を全て流され、現在もパソコンは職員室にしかないという環境の中、図鑑は、子どもの興味をかきたて、ときに癒やしをくれるものとして活躍している。

七夕の短冊に、“いつも動物病院で見るような図鑑がほしい”と書いている生徒もあり、子どもたちは図鑑プロジェクトが続いてほしいと思っているようだ。



生放送の風景 1



生放送の風景 2



戸倉中学 教頭、生徒 『クロノス』中西、古賀
(生徒からのお礼の寄せ書きとともに)

(参考資料)

■6月3日 宮城県 戸倉小学校・戸倉中学校へ直接お届け 現地レポート(番組スタッフ)■

バスで東京から向かったスタッフたちを校門で迎えてくれたのは教頭先生。小学生は2階、中学校は3階で授業を行っているため、それぞれ2階、3階に本棚の配置場所を決定。子どもたちと一緒に段ボールに詰まった本を2階までまず運びました。その後、校庭で贈呈式を行い、記念写真を撮影。子供たちはバスで40分ほど離れた地域から、この校舎に通っているため、遅くとも5時過ぎには学校を離れなければならない、廊下での本棚作りは急ピッチで行われました。



本棚完成後は、子どもたちと一緒に箱を開けて本を並べる作業に。本が箱から出てくるたびに、子供たちからは歓声上がり、スタッフの疲れも吹き飛びました。重い本を友だちと協力して運ぶ姿、みんなで協力して本を棚に並べる姿は生き生きとしていて、スタッフはむしろ、張り切る子どもたちのリーダーシップのもとに動いたという状況でした。



これまで、この学校に絵本が届くことはあっても図鑑が届くことは珍しいというお話でした。特に、子どもたちに愛されていながら津波に流されてしまった『科学のアルバム』という図鑑シリーズを箱の中に見つけたときは、「まるで以前学校にあったものがそのまま全部帰ってきてくれたようだ」(教員)と喜んでいただきました。

子どもたちが好奇心を封印せざるを得ないような状況が続いていた中で、様々な図鑑を目の前にした子どもたちは目を輝かせて口々に「科学者になりたい」「動物が好き」といった言葉を口にし、抑えていた好奇心が蘇ってくるようでした。本プロジェクトの問題意識であった「子どもたちの好奇心の危機」というものが、思った以上に深刻だったということに気づかされたと同時に、前向きな反応をしてもらえたということを楽しみました。

